

『カインの末裔』の成立過程 試論

内 田 満

『カインの末裔』は、大正六年（一九一七）七月、當時有数の文芸雑誌であった『新小説』に発表された。有島武郎がこの作品によつて広範な読者を獲得し、新しい作家として注目を集めたことはよく知られる通りである。そしてこんにちも、この作品は彼の代表作の一つに数えられている。

ところが、この作品をどのように理解するかというもつとも重要な点については発表当時からいくつかの見解があつて、なお定説として抛るべきものがないように思われる。それを解明するためには、敗北していった主人公仁右衛門に仮託された作者の意図と、その形象のもつ意義をたたくとらえなければならぬであろう。小稿では、この作品の成立過程をたどることに重点をおいて、敗北者仁右衛門の持つ文学的意義の一端を考へることになしたい。

1

山田昭夫がさいきん刊行した『有島武郎論』の中に『カインの末裔』を扱つた一節がある。氏はそこに中村孤月・南部修太郎・宮地嘉六らの批評を紹介して、『カインの末裔』は人力感に溢れる筆勢と仁右衛門のギラギラした強烈な印象⁽¹⁾によつて同時代の批評家たちの目をみはらせたようだった、と概括している。これは同時代のプラス評価の公約数であろう。

発表の翌年に江口渙が書いた『有島武郎論』にも、この作品の読後感としてほぼ共通した記述がある。△『カインの末裔』は力作の多い氏のものの中でも稀なる力作であり、かつ傑作である。主人公があはれな妻を追ひ立てつゝ、寒い暗^{くら}の野途を突いて、開墾事務まで辿りつくところや、愈々土地を得て開墾し始めると猛然と強暴な野性を発揮し来るところなど、その一つ一つのシーンは如何にも躍如として鮮かに活き出でゐる。⁽²⁾▽

またその翌年には、石坂養平が『帝国文学』に『有島武郎論』を

書いて、△荒漠たる北海道の自然人仁右衛門の粗野な原始的な言語・動作・生活から迸出する異常な力は私達を威圧せずにおきません⁽³⁾△と感嘆している。ほかに、△読後の印象は極めて強力である⁽⁴⁾△(伊藤整)とか、△イキキした生動感⁽⁵⁾△(浅見淵)・△力強い威圧⁽⁶⁾△(坂本浩)など、読後の強烈な感銘を語った批評や証言は枚挙にいとまがない。『カインの末裔』は、何よりもまず、読者を横なぐりにするような△強烈な印象△を与える作品である。

*

『カインの末裔』の主人公は広岡仁右衛門である。彼がその血脈をうけているという旧約聖書巻頭の『創世紀』のカインは、アダムとエバの子、はじめての△土を耕す者⁽⁷⁾△である。そしてまた彼は、捧げ物を神にかえりみられなかったことを憤って弟アベルを殺した、人類はじめての殺人犯である。血を分けた弟を憎んで殺害するという積極的な悪のふるまいは、蛇にそそのかされて禁断の実を食べたというアダムとエバの過ちとは異質の反逆である。彼は絶対者に対する反逆のゆえに△地上の放浪者⁽⁸⁾△にならなければならなかった。

△何処からともなくK村に現はれて、松川農場の小作人になった⁽⁹⁾△という主人公の設定は、旧約のカインの属性であった△土を耕す者△と△放浪者△の要素を具備している。そして、もう一つの属性である殺害の△悪△、それを引き起こした権威・秩序への反

『カインの末裔』の成立過程 試論

逆が全編を通してなまなましく描き出されていく。

仁右衛門は松川農場で数かずの悪事をはたらく。彼はこの農場にやってくる間もなく隣家の妻と密通し、その後も彼女と逢引きを重ねる。気にいらなことがあれば、相手がおとなであろうが子供であろうがおかまいなしに、男女の見さかしく殴りつける。仕事の手がすくと賭博にふける。農場のおきてを無視して、畑を荒らすという厩林を大量に植えつける。事務所へ納めるべき燕麦を平然と横流しする。そして、子供が死んでからはいよいよ△手がつけられない程狂暴⁽¹⁰⁾△になっていく。笠井の娘が凌辱されたのも彼の作業らしいし、日常生活における常軌を逸するふるまいはほかにも数多い。

このような主人公の数かずの悪事に対する読者の驚きを代弁するかのよつに、『カインの末裔』は悪人仁右衛門とその敗北を描こうとした作品である、という一連の解釈がある。△無自覚なイゴイスト、暴力をふるふ暴虐者と、平和な、幸の多い生活を望むものとの、自然の争ひが如何になるか、比のことに對して深く考へを置いて描かれたならばと思ふ。△これは、前掲の中村孤月の批評の一節である。孤月は、△未開地に於ける一人の野蛮な男を可成り力強く描いてある。其ういふ生活が活躍して眼に見えるやうである△⁽¹¹⁾といいつつ、その△暴虐者△に対する作者の批判が徹底していない

ときめつけている。

秋田雨雀・藤森成吉・勝本清一郎ら七氏による座談会『有島武郎研究』（昭和二十一年）の中で中村武羅夫が△あの人は自分の生活や行動の上にも一つの指標を求めて、それに対して情熱を持って行動しながら作品はどうも猥褻なやうな『カインの末裔』みたいなものを書いて、それに対して批判も何も無い、あゝいふところが嫌いな⁽¹⁰⁾△と語っているのはやはりこの悪人未成敗説が根底にあることを示しているし、熊木善一郎の△『カインの末裔』なんか描かれた醜悪の面と、一方全く反対の清浄の面といふものを描いた『クララの出家』△という対置の仕方もこれに近い。

長谷川泉の見解も同じ系統に属している。氏の所説は、のちに述べる作者の自作解説に端を發した自己主張説をもういちど否定しようとしたもので、右の悪人未成敗説のように直線的でないのが特色である。△仁右衛門の赤裸々な野性のエゴはテーゼとしての問題提起ではなくして、アンチ・テーゼとしての問題提起であることも考えてやる必要がある。……かつては王者の如く暴力をふるった「エゴの末路」は、あの作品の説得力では不十分な、不徹底なきらいがあることは否定できない。『カインの末裔』の限界はそこに存在すると私は思う⁽¹¹⁾△

これらに共通しているのは、いずれも、作者は仁右衛門の悪をな

まなましく描いているけれども、それに対する批判がない——あるいは△説得△の△不十分な、不徹底なきらい△がある、とする考え方である。作者は広岡仁右衛門というしたたかな悪人を作り出し、その没落してゆく姿を描くことによって、思いのままにふるまう人間の悪をいましめようとしたのであろうか。

*

仁右衛門は△土を耕す△すべ以外は何一つ知らないのではないかと、疑わしくなるやうな男である。彼は、文字の読み書きがまったくできない明き盲であり、△簡単な暗声で動物と動物が互に理解し合ふやうに△妻との間ではほとんど言葉さえいらぬ。氣に入らないと所かまわずつばを吐きちらすし、相手が弱者であれば野獸のように飛びかかるが、△人の氣配△を感じると妙におびえ、△広壯な建物を見ると胆をつぶす。彼は捨て身になって人一倍働くのだが、農具を借りてもっと手際よくやろうという知恵や才覚は浮かばないし、それを教えて貸し与えられた金も一夜で飲んでしまふ。△彼の前にあるおきてはまず食ふ事△であり、いま△食ふ△ためには渾身の力をふりしぼるけれども、この農場で自分がどんな条件で働くことになるかという小作人にとっては死活に関する契約の内容も問題にしていなかつた。だから、△食ふ△条件をよくしようという懇請に加わるやうな廻りくどい話は歯牙にもかけようとしぬい。

これはもう、人付き合いがよくないとか要領が悪いとかの表現で片付く人間ではない。はやく宮地嘉六の批評に単人に文明人に対する野蛮人の敗北としてこの作を評すべきではないVと指摘されていたのは、一方に△野蛮人の敗北Vを描いたものだとする読み方があった——あるいは想定されたことを物語っている。江口渙がこの作品を『凱旋』とならべて、△共に原始人に近い盲昧なる強者を中心人物として、更にそれぞれの地方色をからませたものであるVと書いているのなどは、その適例であろう。のちに村松梢風が、△殆ど原始人に等しい一個の開拓農民の姿を点出し、傍若無人・縦横無礙な主人公の性格と、自然に不幸に落ちて行くその運命を描いたものだVと書いているのも、やはり△野蛮人の敗北V——文明に適応しきれない原始のままの人間の敗北というパターンに属する。

いかに地方色ゆたかな北海道の農場にも、すでに原始人の生棲する余地は残されていなかった。そこでも△掠奪農業Vは禁じられ、△小作料は三年毎に書換への一反歩二円二十銭である事、滞納には年二割五分の利子を附する事、村税は小作人に割り当てる事Vなど、農場の経営機構——小作人に対する支配体制がすまきもなくはりめぐらされていたのである。函館の△金持Vたという農場主は、農地を△土Vとしてでなく資本として所有する不在地主であったし、仁右衛門でさえ彼に△どやし付けられVた後には△農場の空の

上までも地主の頑丈さうな大きな手が広がってゐるやうVな威圧を感じざるをえなくなる。笠井が口にする△親方が親で小作は子だVというような言葉はもはやぞらぞらしい空念仏に帰するような状況が進行していたのだ。桑島昌一の調査によると、明治三五年ころには札幌製線会社が狩太に工場を進出させていたことだから、不在地主ばかりでなく工場資本もまた利潤追求のために彼らの労働力を必要としはじめていたのである。

こうして、△文明Vにしばらく上げられた社会の一隅に仁右衛門のような△原始人Vの生存は許されない。彼が特異な△原始人Vである以上、農場の小作人集団からはみ出していくのは当然の帰結であり、彼は社会生活への適応性を欠いた一個のあわれな特殊人に過ぎない、ということになる。しかし、『カインの末裔』の創作意図はそのような一介の特殊人の悲劇を描こうとするものではなかった。

(1) 山田昭夫『有島武郎論』(昭和41年・近代作家叢書・明治書院)

(2) 江口渙『有島武郎論』(「文章世界」大正7年4月号)

(3) 石坂養平『有島武郎論』(「帝國文学」大正8年10月号)

(4) 伊藤整・現代小説大系『有島武郎集』解説(昭和24年・河出書房)

(5) 浅見淵『有島武郎論』(昭和18年「近代日本文学研究」大

正作家論」上巻所収・小学館)

- (6) 坂本浩『カインの末裔』『実験室』解説(昭和29年・角川文庫)
 (7) 『創世紀』第4章2節 (8) 同上 第4章12節
 (9) 『カインの末裔』(以下この作品からの引用は注記しない。)
 (10) 座談会『有島武郎研究』(昭和11年「明治大正文藝研究」
 所収・新潮社) (11) (10)と同じ。

(12) 長谷川泉『カインの末裔』(『国文学解釈と鑑賞』昭和29年
 3月号・のち『近代名作鑑賞』に所収・至文堂)

(13) (12)と同じ。

(14) 村松梢風『有島武郎』(昭和26年「近代作家伝」(下)所収)

(15) 桑島昌一『カインの末裔』論』(『日本文学』昭和31年4
 月号)

2

有島武郎の創作活動は『カインの末裔』発表の一〇年以上も前から
 はじまっていた。彼が八初めて世の中に発表した⁽¹⁶⁾作品だと語っ
 ている『かんかん虫』は「白樺」創刊の年(一年前)に発表されて
 おり、その末尾にしろされた執筆時期はさらに数年さかのぼる。⁽¹⁷⁾

『かんかん虫』から『カインの末裔』までの間には、『或る女の
 グリンプス』[An Incident]『宣言』『サムソンとデリラ』『大

洪水の前』などを含む小説・戯曲や、『二つの道』『草の葉』『ク
 ロポトキンの印象』のほか『惜みなく愛は奪ふ』の未定稿など、重
 要な評論・感想文が書かれている。『カインの末裔』もまた、それ
 らの諸作品につづく彼の創作活動の一環として生まれたものであ
 り、同時にのちの『生れ出づる悩み』や『或る女』に展開してゆく
 可能性を胚胎した作品であって、偶然に成立した突発的なものでは
 ない。

『カインの末裔』をみずからの内的必然の産物として定着した作
 者にとっては、さきに紹介したような悪人未成敗論や原始人没落論
 はがまんのならぬ曲解であった。彼は大正八年一月の「新潮」に
 『自己を描出したに外ならない「カインの末裔』』と題する自作解
 説を書いて作者の意図を解しない一部の批評家に鋭く反駁し、その
 主題をつぎのように説明した。……人間の内部には、自分でも思い
 がけぬような欲求や思念が錯綜している。わたくしもまた同じで、
 生活の背後にはそれらが伏在しており、人その各々に芸術的の表現
 を与へんとする欲望⁽¹⁸⁾を感じて筆を執るのだ。『カインの末裔』の
 主人公がいかに自分とかけはなれた存在に見えても、それもまた人
 自己を書き現はし⁽¹⁸⁾たものにはかならない。読者はそこに(人人間の
 已むに已まれぬ生)に対する執着の姿を見て貰ひたい⁽¹⁸⁾。

この解説文は『カインの末裔』発表後一年以上を経て書かれてお

り、その間にこの作品に寄せられた感動の言葉や、堰を切ったように人多作をした年⁽¹⁹⁾を経てきた自信に裏付けられた口吻もないではないが、その中心をなすモチーフはまさしく執筆当時の心構えであったと信じられる。彼が仁右衛門に仮託した、人生に対する不思議な我執^レにつき動かされる人模索の生活^レとは、広義には有島のすべての作品に流れ、彼自身の生活そのものを貫く基調音であったと言える。

明治四〇年（一九七）春、有島は、アメリカ留学からヨーロッパ遊を終えて帰国した。彼はその船旅の間に読んだ『アンナ・カレニナ』にいたく感動して、そのヒロインについてこう書いた。『彼女の生涯は嵐のやちである。否、暴風雨である。……神はかゝる人類を生み出す。そして、それは、必ず苦しむ。憐れな魂よ！ 生れながらの征服者であると同時に生れながらの敗北者——この世の中の最も悲劇的な逆説^{インヴェルシオン}である。世人をして、かゝる魂を、その常識と云ふ低級な尺度で測らしめること勿れ。世間は彼女を知つてゐないのだ。彼女はこの世に属してゐるものではないのだ。——迷子の天使とでも云ふがよからう。可愛相な魂よ！』⁽²⁰⁾

当時彼は二九歳であった。人私を憂鬱にするものは何であらう。今日、私は涙が出て、留めることさへも出来なかった。而もどうしたのかもわからない。恐らく、自分の内に、不思議な矛盾があるの

だらう。……然し私は、今この矛盾の範囲が広くとも遺憾だとは思はない。どうか、一個の人間として、生きさせてくれ⁽²¹⁾とも書いている。帰国した年の夏、彼は父にともなわれて北海道狩太の農場を視察に行った。そこで彼は農場経営の仕組みの中に非人間的な歪みを見せつけられ、開墾請負人に対する父の駆け引きがきっかけになって父とはげしく口論してしまう。彼の主張は、農場の小作人にももっと人間らしい生活ができるようにすべきだ、というものであったが、逆に、親に食わせてもらって遊んで暮らしながら批判がましいことを言う資格はないはずだとののしられて絶句した。

父は彼を恩知らずだときめつけた。しかし彼はその言葉にもうひとつの声を聞いたのである。口はばつたことを言うな、農民から小作料を取るの間違つているというならお前も共犯者ではないか！——肩をそびやかして父に反論していた彼はそれを聞くところまち後めたさを感じ、まったくどころどころになってしまう。農場経営の方法を改善して小作人の生活を向上させるべきだ、農民に寄生している地主の存在は許せないと考えることは彼のゆるがぬ信念であり、いま父への非礼をもちえりみずあえてそれを訴えている自分は小作人の立場を代弁しているのだというひそかな自負もあった。ところが、こともあろうにその自分自身が小作人に寄生する犯罪者の一味にすぎなかったのだと思ひたつて、たちまち言葉をう

しなつたのである。しかしそれで彼の信念が消滅したわけではない。彼は親の財産に庇護されて暮らしている自分の立場にあらためて苦痛を感じ、自我をとりまく壁の厚さを思い知らなければならなかった。

その秋には短期間の軍隊生活を終え、やがて東北帝大農科大学の英語教官として札幌に赴任する。彼はそこで、△一日も早く此教会の束縛より脱逸せんことを希うて止まず▽と胸中にくりかえしながらも、札幌独立教会史編纂の仕事を引き受けたり日曜学校の校長をつとめたりしていた。また一方では、社会主義研究会に出てラスキンを講じたり、社会主義とキリスト教の関係について語る友人の説に耳を傾けもした。彼はその矛盾した状態を△我は未だ尚ほ中有に懸れり。身を定めて善かれ悪しかれ心すがすがしくなる迄は、我が心は到底休安を知ることな(し)。この休安を知る事なき我が心こそ尊けれ▽と書いている。

アンナの△暴風雨▽のような生き方に共感しながらも、父の高圧的な態度に自我主張をはばまれ、虚偽にみちた軍隊生活を義務として課され、結婚の問題について△癒す可からざる深き疵▽を受け、心ならずも教会の仕事を背負い、しかもつとめて平静に教壇に立っていた彼の胸中には、何かに叩きつけずにはいられないげしい衝動が渦巻いていた。しかし、その衝動の本質がどんなものであるの

か、何からどう解決すればよいのか、それは彼自身にもさだかにはつかむことができなかった。△思はぬ時に、時々來つて、余をしつかりつかみ、殆ど身懷ひせざるを得ない程の、あの不思議な思ひは何であらう。▽彼はそれを追求する手たての一つを文学に求めた。

ゴリーキーの『オルロフ』を読んで感動し、△此くの如く予も書けるなら!▽と羨望の念を禁じえなかつたのもこのころである。そこには、△その血の一滴まで自己に誠実▽であつても没落にいたる男、その人殺しの夫に△身も魂も捧げてゐて、尚けたかい▽女、そしてどのように生きていけばよいのかわからなくて苦しんでいる彼らを嘖みさいなむ△無慈悲な世間▽がなまなましく描かれてゐる、と彼は贊嘆した。このとき、彼はすでに『或る女のグリンプス』のすぐそばに立っていたのである。

『或る女のグリンプス』の多鶴子が、国木田独歩の妻であつた佐々城信子をモデルにしたものであつたことは周知の事実である。有島はこの女性の姿かたちを借りて、彼を身聞えさせた△不思議な思ひ▽——未分化の衝動をうつつし出そうとした。むろん、彼が渡米前に面識のあつたこのスキヤングルのヒロインを記憶の中から呼び起こし、△常識といふ低級な尺度▽をとりはらつて△その血の一滴まで自己に誠実▽に生きようとした△憐れな魂▽であるという解釈を与えるに至るまでにはなお時日と契機が必要であつた。その最大の

ものは帰国後二年を経てはじまった結婚生活であつたらうし、女性
は男性に従属すべきものと決め込んで疑わなかつた社会的偏見に対
する抗議の意図もあつたと思われる。君臣・父子・夫婦など、儒教
のいわゆる五倫五常を徳とする封建道徳の残滓は、彼自身をも金縛
りにしているいまわしい桎梏であつた。また、作中の多鶴子と古藤
の関係から、彼は理屈ぬきで信子に△参つてたんじやないか▽、そ
れが彼女をモデルにしてあれほどにまで書けた一つの動機ではない
か、という見方もないわけではない。⁽²⁷⁾

しかし、『或る女のグリンプス』の根幹となつてゐるのは、作者
をつき動かした△身慄ひせざるを得ない程の、あの不思議な思ひ▽
以外のものではない。道ならぬ慾に身をもちくずしていく女だと指
弾されながらも常識の限界をふみこえて自我を押し通した信子の生
き方に、彼みずからの△不思議な思ひ▽を仮託することが可能であ
るという視点を彼が獲得したこと、言いかえれば信子をモデルにし
た形象を通してその△不思議な思ひ▽を表現することができるので
はないかという着眼がこの作品を生み出したのである。このとき彼
にとつては、信子の生き方から導き出された奔放な多鶴子を描くこ
との方が、やり場のない自己の内面やその日常を書きつらねる饒舌
な独白よりもいっそう身近かな自我主張だったのである。彼はこう
して、自分の体験を事実そのままになぞることよりも虚構をかりた

作品がかえつて深くその真実を表現する道に通じるといふ、文学に
おける虚構のはたらきを体得していったと言ふべきだろう。

むろん、この作品をのちの『或る女』と対照すると稚拙のそしり
はまぬかれぬ。作者のもうひとりの分身であつた古藤の扱い方が
不安定であるし、用字用語などにも彫琢の行き届かぬ点が多い。し
かし、信子をモデルにして虚構の世界に踏み込んでいったこの作品
は、正体の判然としない自我の追求という困難な主題に立ち向うに
ふさわしいシチュエーションを形成している。この題材を選んだ作
者は、自分自身とへその緒が切れていて、しかも△切れながら放電
している▽と読者に感得させるような主人公を設定することによつ
て、正体の判然としない自我のうめきを文学作品として提起しうる
形象の造型に成功したのであつた。

『或る女のグリンプス』は、大正二年三月まで足かけ三年にわた
つて「白樺」誌上に断続的に発表された。筆のおもむくままに、流
れるように書いたという作品ではない。その間に彼は札幌独立教会
を去つた。社会主義研究会での活動などから、北海道庁の監視を受
けるというようなこともあつたらしい。また、長男行光・次男敏行
がつづいて生まれたのもその掲載中であつた。大学では、学長付主
事や入試委員などを命じられて規則正しい勤務を続けていた。

この作品をひとまず書き終つた彼は、在米中ふかく影響されたホ

イットマンにふたたび心を寄せ、『ワルト・ホイトマンの一面』『草の葉』などの紹介文を書いている。——このとりとめもない暮らしをしていた男（ホイトマン）の心の中に「目まぐるしく働いて居るもの」がある事は、その兄でも知らなかった。この三十男の心の奥には simmer する何者かあったのだ。それを彼と雖もどうすればいゝのか判らなかつた²⁹⁾。

これはまたそのままのみずからの一面面にはかならないのであった。彼の心の奥にもたぎりたつ「不思議な思ひ」が音をたてていた。ホイトマンはエマソンによつて simmer してつあつたものを「boil over」せせられたらう。しかし、ホイトマンは有島を「たぢ」boil over せせはしなかつた。翌年に発表された『An Incident』は simmer してつながら boil over する³⁰⁾とのかなわぬ日常生活の苦しみをくつきりと写し出している。

伊藤整が『An Incident』を『小さき者へ』を手がかりにして有島武郎とその文学をとらえようとしたのは一つの鋭い着眼であつた。伊藤は『An Incident』の結末の箇所て妻への怒りがそのまま爆発できないのは「自己にも向けられ得るが故に他へも向けられる」の個性尊重の気持からであると言ひ、その「激情」を物語るもう一つの作品の例として『小さき者へ』を重ねる。そして、「鋼鉄の圍壁する中での火薬のやうに、この人は激情を自らの論理の粹の

中ではねかへらせてゐたのだ」と書き、そこから『或る女』や『カインの末裔』が生まれたのだと主張している³⁰⁾。

この指摘は、たしかに有島の実生活と文学を貫流する太い流れを握り当てていると思われる。いかにも、「激情」と「抑制」をぬきにして有島武郎と彼の文学を語ることは不可能であろう。有島自身にもそれは痛切に自覚されていた。『二つの道』から「惜みなく愛は奪ふ」へ、さらにその晩年へと、「抑制」された「激情」をいかに boil over するかが彼の生涯の課題であつたと言つことも可能であろう。しかし、ぼくらはそれを一歩進めて、その「激情」が何に向けられたものであつたかを見きわめる必要があるし、文学の問題としてはその「激情」がいかなる方法をかりることによつて作品として boil over したか（あるいは boil over しえなかつたか）を考えなければならぬと思つのである。

織田正信は、有島の作品が驚くべき広範囲な読者層をもつた秘密は、「たとえ私個人の間ででありたい」と宣言した、その創作態度にあつたとして³¹⁾いる。この宣言は、二九歳の日記にあつた「どうか、一個の人間として、生きさせてくれ」という衷心の叫びの延長線上にあると言えよう。またのちに、「如何なる要求に依り、如何なる態度に於て創作をなす乎」という雑誌編集者からのアンケートに答えた有島の言葉もそれを裏書きしている。彼はその質問に対し

て、△私の周囲には習慣と、伝説と、時間と、空間が十重二十重に
障を築いてゐて、或る時は窒息するかと思ふほど▽だと言ひ、そん
な生活のなかで心の中に見出しなわれわれようとするものを△しつ
かりと純粹に回復してゐるもの▽として文学を選び、△生活が作
品によつて改造される▽ことをねがいつつ筆を執るのだ、と語つて
いる。⁽³²⁾織田正信が指摘している通り、有島の文学は△書かんが為に
生活した人の作品ではなくて、生きんが為に生活した人の作品▽な
のである。△どうか、一個の人間として生きさせてくれ▽という彼
の△激情▽は、その周囲に△十重二十重に障を築くものに立ち向
かひざるをえないのだ。

『An Incident』発表と前後して彼が友人兄助素一に書いた手紙
にこんな一節がある。△僕も四十までは今の境遇に我慢するが、そ
の年になったら縦令親父存命と雖も狩太に引込み度いと思つて居
る。僕は段々と心底からその必要と楽しみとを感じて来て居る。僕
は謹んで内部から物の静かに成熟し結果するのを待つてゐる。もう
我々も所謂 Life Work に落付くべき時機が到来したと思ふ。⁽³³⁾▽
——狩太に引込むとは、教職を離れ農場の監督をしながら創作に励
みたい、という計画である。父武は有島が教職を離れる事を許さな
かつたのである。もちろん、三〇代もなかばを過ぎ、すでに二児の
父であつた有島が、たつて主張すればその希望は容れられたに違ひ

ない。しかし、キリスト教入信の際の軋轢、結婚問題をめぐる不
和、なかんずくのちの作品『親子』の素材となつた農場問題に関す
る激突などを思い出すと、彼は互いを傷つける葛藤をこのうゑに重
ねることに耐えられず、もうしばらくは△の境遇に我慢する▽こ
とにしたのであつた。

この断簡は、『或る女のグリンプス』を経てもういちどホイット
マンの激情にふれた彼が、畢生の仕事としてはつきり文学を志向し
たことと、それをなお直ちには決行しきれない内的および外部条件
の未成熟を自覚したことを物語つている。彼は△激情▽に独自のひ
そかなプログラムを課してそれを△抑制▽したのである。この△抑
制▽は、単なる抑圧ではなくて進出への身構えであつたと言ふべき
だろう。

ところがその直後、妻安子が結核に罹つて発病し、北海道の気候
はよくないといつので平塚に転地療養させなければならぬことにな
つた。看病の必要から彼も東京へ移ることにになり、一家をあげて
転住がきまつた。彼はこうして、まったく突然に教職辞任を許され
る。⁽³⁴⁾上京・帰札・残務整理とあわたたしい月日が過ぎて、ようやく
友人に近況を報じた手紙の中には、△これで一つ束縛がとけた▽と
述べ懐しつつも△愈々浪人となつた。今後の事は自分でも知らない▽
と書き加えている。⁽³⁵⁾彼は後年、『即実』と題する講演の中で、この

年（大正四年）を作家生活の第一年として³⁶いるが、この手紙の言葉などは「紀元」を画する宣言としてははつらつたる生氣に乏しく、むしろ不安の影が濃い。待ちわびた門出ではあったけれども、予期せぬ時期ににわかに道が開かれたことに對する不安な戸迷いが感じられる。

父や妻、そして周囲の誰彼に對する彼の顧慮やいたわりについてはいちいち述べるいとまがない。△孝行息子であり、優等生であり、紳士であつた³⁷という本多秋五や、△良き主人であり、また良き嫡男だつた³⁸という唐木順三の言葉などに簡潔に要約されている通りである。翌年の夏には、札幌の友人に宛てて、△私の創作欲はかなり旺盛なのですが周囲の事情が其欲を圧抑して困ります△と訴えている。そして、同じ手紙にまた△妻の病は膏肓に入りました。

……死が近づくとつれて、私には彼女に對する執着が強くなつて行きます。彼女に對する是迄の態度に對しての後悔がむらがり起ります△とも書いている。³⁹精いっぱい力をふりしぼりながら、仕事にも不満足であり、実生活にも後悔がむらがり起こるといふ彼に、ほかにどんな生き方があつたと言えるだろうか。彼は当時、実生活の面にもう一つやっかいな問題をかかえていた。それは実弟壬生馬夫妻の離婚問題である。妻が実家に去つたことに衝撃をうけた壬生馬や、家名を傷つけられたとして激昂する父に代つて、彼はかなり長

い期間その收拾のために奔走しなければならなかつた。⁴⁰もっとよい仕事をもっと多くと焦慮し、末期に近い妻を看病しながらもわずらわしい折衝に力を尽した彼の内面は火を吐く煉獄のようであつたに違いない。

妻はその八月に死ぬ。ついで秋、こんどは父が胃癌だと宣告される。△本当を言ふと、自分の仕事を心ゆくまでする為に……ひそかに父上の死を希望してゐた。併し此の由々しい知らせを聞くと、父上の生命に對する私の態度は、すっかり變つて了つた。私は唯父上の怖復を希ひ望む許りた。神よ！ 其は余り残酷すぎます。残酷すぎます。△——彼は果然自失した。しかし同じ年のうちに、父もまた死ぬ。

もう後にはもどれぬ。ルビコンは渡られたのである。けれどもそれは、彼が後年に回想して書いている△もう義理もへちまもない△⁴¹というような歓声をあげての突進だつたとは考えられない。彼が *bois over* するまでにはいまいちどの屈折が必要であつた。有島が妻の遺稿集『松虫』を編み、戯曲『死と其前後』を書いたのは先立つた妻への心をこめた追慕であるとともに、妻のいた生活との訣別でもあつた。

大正六年（一九一七）は亡父の仏事にはじまつた。三十日祭・三十五日祭・五十日祭とつづき、知己への形身分けや香奠返し、遺産相続

などを済ませた時はすでに二月もなかばであった。その間、彼はしきりに農場問題に心を寄せ、△生活の変革を強ひられるやうな心の状態△を訴えている。父の死にともなつて有島家の家長となつた彼は、茫漠たる自由⁽⁴³⁾とともに不在地主であり無為徒食の可能な資産家であることの重圧⁽⁴⁴⁾をもじかに受け止めなければならなかつた。むろん、それをことさらに自由⁽⁴⁵⁾と感じ、あるいは罪悪感をともなう重圧として苦惱したのは彼の特異な潔癖性や鋭敏さに帰する見解も成り立とう。彼はそのような内面の息づまる葛藤を報じた友人への便りの一節に、△生活の内容を神経質に始終慮慮して煩悶する事は馬鹿げた事のやうに思ふ時もあるが、これが病で仕方がない△と自嘲めいた注釈を加えることを忘れていない。文学⁽⁴⁶⁾以前の問題でありながら、同時に彼の場合には文学の根幹をなすと確信された生活⁽⁴⁷⁾上の諸問題を、来る日も来る日も熟考していたことがうかがわれる。

農場解放を言外に予告した『武者小路兄へ』が書かれたのは『生れ出づる悩み』の後であるが、このころに書いた『ミレー礼讃』にも△汝の額の汗によって生くべしと云ふ永劫ゆる事なき人類の運命△△△の汗によってパンを喰はざる可からずとは遠い世紀の昔に云はれた言葉△△△の汗によってパンを喰へと命じた神の宣告△△△というように一つの命題がくりかえして出てくる。⁽⁴⁸⁾△額の汗によって生△△△きる小作人を擁護しようとして、かえつて△遊んでゐて

飯が食へる△身の上をあげつらわれた『親子』の事件は、彼にとつて身を焼かれるやうな屈辱の記憶であつた。

安川定男が書いているように、その父に対する感情を△敬意と反撥のアンビヴァレンツ△に支配されていた有島が、父亡きいま、父子の間における最大の衝突であつた『親子』の事件をもういちどとらえなおし、それを越えてゆく所に新しい生活と文学の路線を引こうとしたとは考えられないであらうか。彼が死の直前に発表した私小説『親子』の草稿は、おそらくこの時期に手がけられたものであつたらうと思う。それは、父のいた生活⁽⁴⁹⁾との訣別であるとともに、額に汗せずしてパンを食う生活への墮落をわが手で封じようとする、初志⁽⁵⁰⁾宣明の試みであつたと思われるのである。

あの争いは、彼自身も何からどう手をつけていったらよいのかということばかりにまよひ、目の前に農民の悲惨な生活を見せつけられ、しかもそれを疑つてもみないばかりかかえつて足場にしていた父の考え方に強い反撥をおぼえて夢中で抗弁したことからは始まつたものであつた。それは帰国して間もないころの自我主張とその挫折の体験であつた。彼はその後、父が死ぬまで同じ形での自我主張は二度と繰り返さなかつた。しかし、どうかして現状を變革していかなければならないという思いが△不思議な我執△という不分明な衝動として胸中ふかくすぶりつづけていたことはさきに述べた

通りである。

『親子』は完結しなかった。この時からさらに七年ののちに発表された定稿『親子』は、その末尾に添えられた父子の和解という異質のモチーフのために分裂している。衝突にいたる過程の叙述は結末の和解を配慮してかなり注意ぶかく書き進められているが、やはりその和解は妥当な契機を持つことができず、作品としては失敗に終わっている。父の老獪さも小作人たちの姑息というほかない保身の策も、その源は底知れぬ淵のような体制そのものの欠陥から来ている。まっとうな自我主張であり農場経営の歪みの告発であったはずの子の主張を△ひとり▽として反故に帰さなければならぬところに、この作品のシチュエーションの自家撞着があった。

みすからの体験に素材をとった『親子』草稿の挫折は有島に新しい目を開かせた。彼はそれを書き悩むなかで、父も子も小作人も、それらすべてをもっと大きく外側から縛りあげている△嘘▽——体制そのものの非人間的な仕組を肌身感じずにはいられなかった。それはもはや父と子のいさかいで片付く問題ではなかった。この主題の前には、『親子』のプロットになっような父と子の反目やいたわり合いなどはいずれもその根元の透視を妨げる夾雑物であるにすぎない。

もちろん彼が感じたものは多分に感覚的な、虚偽に対する怒りの

情とでもよぶべきものであったろう。それを社会科学的な認識と同一視するのは飛躍である。仁右衛門や葉子が身を滅ぼすことによつてはじめて体制を批判する者となりえていることと、体制や習俗に対する自我の主張が作中においてそれを媒介するものを描き出すことができなかったことはかならずしも同義ではないが、彼の代表的な諸作品が『カインの末裔』『或る女』のような破滅か『生れ出づる悩み』のような途上か『星座』のような未完に終わっていることは、作者主体の中において、本質的に体制批判の要素をもった自我主張を有効に機能させる方法をそれと定かに把握できなかったことと関連している。

ともあれ、△抑圧▽された実生活における体験や自分の姿をいかに誇張して描いてみても、そこなわれた自我主張——うしなわれた真実の回復にはならない。『親子』の軋轢における子の主張に執着すればするほど彼によみがえってくるのは屈辱の苦い後味と、それにまつわる運命的な共犯の自虐ばかりであった。いまも胸中に simmer じつづける△不思議な我執▽を作品に定着しようとするは、体験の還元ではなく、現実には獲得されぬ虚構の方法をかりる以外にないことを彼は知った。

実生活のなかにそれを見付けることはできない。かつて『或る女のグリンプス』を書かせた佐々城信子のようなモデルはもういなか

った。そのモチーフをそのまま仮託しうる実在の人物が彼を待ちうけているわけではない。(彼が木田金次郎によって『生れ出づる悩み』を構想することになったのは『カインの末裔』の半年ばかり後である。彼はその出会いをほとんど希有の出来事として小躍りした。) 実在の人物を主人公としてかりる方法が不可能であるからには、彼は自分の手でその主人公を造型することから始めなければならぬ。これは虚構の作品を書くこととする作者の責務である。しかし同時にそれはまた作者の特権でもあった。

彼は、主人公を造型し虚構のシチュエーションを創造するに当って、その主題を表現するのにもっとも適切な条件を作り出すことができた。△親に食はせて貰ってゐる▽た主人公は、誰の庇護もうけることができずに妻子をかかえてただがむしやらに生きていかなければならぬ一個の農民に転落する。△何処からともなくK村に現れ▽たという仁右衛門は、地位・財産はむろんのこと故郷さえもっていない流れ者に過ぎない。農場主と彼は親でもなければ子でもない。また、一〇〇枚に満たないこの作品の中で、秋の終りに始まった戦いから四季とりどりの変化のなかに主人公の内面とふかくかわりつつ敗北までの曲折をくつきりと浮かびあがらせる役割を果たしている。さらに、小才のきく筈井や無気力な佐藤の設定も、ただ単

に保身の策を弄しあるいは現状に甘んじている小作人の類型であるにとどまらず、彼らはぬきさしならぬ現実感をもって仁右衛門の行く手に立ちあたかっている——作家有島の『或る女のグリンパス』から『カインの末裔』への成長は、形あるものにモチーフを仮託することから、モチーフを表現するにふさわしい形をつくるという新しい創作方法を獲得した点に読みとられなければならない。

(16) 講演記録『即実』(大正11年・「有島武郎全集」新潮社版第7巻)以下全集からの引用は(巻次・ページ)のように示す。

(17) 『かんかん虫』(I・三〇二)末尾に「一九〇六年於米國華盛頓府、一九一〇年十月白樺所載」とある。「白樺」の方にはこの執筆場所・時日の注記はない。(この作品の成立にはかねがね疑問を抱いていたが、こんど安川定男氏らの手によってその草稿が発表されるはこびになったので、解明の糸口が得られるものと期待している。)

(18) 『自己を描出したに他ならない「カインの末裔」』(VI・二七)この文は「新潮」誌の八出世作を出すまで▽と題する特集企画に寄せられたものである。

(19) 談話筆記『嘗てない多作をした年』(VII・五五)

(20) 日記『観想録』一九〇七年三月三日付(X・一四〇)

(21) 右と同じ。一九〇七年三月六日付(X・二三三〜三〇〇)

- (22) 右と同じ。一九〇六年一月三日付 (X・一五〇)
- (23) 右と同じ。一九〇六年一月三日付 (X・一五〇)
- (24) 右と同じ。一九〇六年一月三日付 (X・一五〇)
- (25) 右と同じ。一九〇六年二月三日付 (X・一五七)
- (26) 右と同じ。一九〇六年二月五日付 (X・一五七)
- (27) 座談会『近代日本文学史・有島武郎』(『文学』昭和37年1月号) 八吹田(順助)……僕なんか口が悪いけれども、古藤は少し葉子に参ってたんじゃないかときいたんですよ。本多(秋五)それは嫌疑濃厚ですよ、もちろん。……非常に印象が強かったですよ、つまり。V
- (28) 右と同じ。勝本清一郎の発言。
- (29) 『ワルト・ホキットマンの一断面』(V・一六四)
- (30) 伊藤整『有島武郎』(昭和10年・のち現代日本文学全集『有島武郎集』に所収・筑摩書房)
- (31) 織田正信『有島武郎論』(昭和9年「日本文学講座」所収・改造社) なお、八とまれ私は一個の人間でありたいVという言葉は「有島武郎著作集」の扉に記されたものだという。
- (32) 談話筆記『四つの事』(V・三〇)
- (33) 足助素一宛書簡 一九〇四年三月五日付 (VIII・一六二)~(一六三)
- (34) 鏑田研一『有島武郎』(昭和21年「日本の文学者」所収・全国書房)
- (35) 足助素一宛書簡 一九〇五年四月四日付 (VIII・一四四)
- (36) (16) と同じ。八私が小説家になったのも極めて晩年……三十六のときでした。V (VII・四七)
- (37) 本多秋五『有島武郎論』(昭和27年・のち『白樺』派の文学』に所収・新潮文庫)
- (38) 唐木順三・現代日本文学全集『有島武郎集』解説(昭和29年・筑摩書房)
- (39) 吹田順助宛書簡 一九〇六年七月八日付 (VIII・三七)~(三八)
- (40) 小稿『孤鸞鏡中影』をめぐって』(昭和38年「京都府私学 研究論集」第一号所収)
- (41) 『リビングストーン伝』第四版への序』(VI・九)
- (42) 原久米太郎宛書簡 一九〇七年一月六日付 (VIII・三四)
- (43) 『ミレー礼讃』(V・五五)~(五六)
- (44) 『親子』(以下この作品からの引用は注記しない。)
- (45) 安川定男『有島武郎研究』X(昭和37年「同時代」14号)

『カインの末裔』執筆までの過程をこのようにたどってくると、作者にとってその主人公が一介の悪人や野蠻人でありえぬことはお

のすからあきらかであろう。作者がそれらの諸評に対して強く反駁したのは当然である。仁右衛門を一般の人間とかかわりのない一個の特殊人として葬られることは、作の巧拙に關する批判であることとどまらず、作者自身の自我に立脚した体制批判そのものが特殊の烙印を押されることに通じる。彼は仁右衛門という虚構の形象の△已むに已まれぬ生に対する執着の姿▽をなまなましく描いて見せることによつて、△十重二十重に牆を築く▽体制の習俗の中で悶えつづけるみずからの△不思議な思ひ▽を普遍の場に提示しようとはかつたのであつた。

本多秋五はその『有島武郎論』のうちで『カインの末裔』にふれた二節にこう書いている。△孝行息子であり、優等生であり、紳士であつた有島には、強く抑圧された欲求があり、そこから、一方では抑圧を独り耐へてゐるものに同情を禁じえなかつたこともに、他方ではその抑圧を突破しようと試みて身を破る人間に本能的な牽引と共感を感じた。彼は社会的には非のうちどころのない紳士としての生活を維持しながら、その抑圧された欲望を充足させる間接手段として作品を書いたのである。⁽⁴⁶⁾▽

敗北を予見しながらも、なお身を投げ出していくというファナティックな生き方はたしかに有島自身のものであつた。彼が『或る女のグリンプス』において、身をもちくずしていった佐々城信子をモデ

ルとしてそれに自我を假託したのもこのことと無縁ではないし、晩年に敢行した農場放棄の経緯にもそれは歴然としてゐる。

大正七年（一九一八年）八月、武者小路実篤が日向で「新しい村」を始めたとき、有島はその試みを称賛しながらも△あなたの方々が如何に綿密に思慮され実行されても失敗に終ると思ふ▽と言ひ切つた。そして、自分もまた心にきめてゐる企てを実行して△存分に失敗しようと思つてゐます▽⁽⁴⁷⁾と書き加えた。失敗を予告された武者小路は腹を立てて反駁したが、有島の真意は失敗するから止めた方がよいというのではなかつた。四年のちには彼自身もそれが△四分八裂して遂に再び資本家の手に入ること▽⁽⁴⁸⁾を承知のうちで農場放棄にふみきつてゐる。そこには、武者小路のような楽天主義などは異つた着想があつたはずである。自暴自棄とも言えないし、徹底辯と言つてみてもとらえきれないものがあるように思われる。それはおそらく、一粒の麦が地に落ちて死ななければ多くの実を結ぶことができないというキリストの言葉からうけたなかに倫理的ないけにえの心情と、地主の側から土地を放棄するという衝動的な行爲に出ることによつて体制の自壊をうながす端緒を開こうとするラジカルな扇動家の着眼とが重なりあつたものであつた。

しかし、引用した本多説の後半にある△彼は……抑圧された欲望を充足させる間接手段として作品を書いた▽という見解には賛成で

きない。有島の作品、とくにここでとりあげている『カインの末裔』などを、欲求の補償や実生活の平衡回復をねらったものと片付けるのは誤りである。さきにも紹介したように、有島は「生活が作品によって改造される」ことを目的として創作するのだ、と言っている。彼はその逆もまた真であると考えていたわけで、『カインの末裔』の自作解説に、この作品の「構図が抽象的である」という非難に対して「私の力の足りない事を、即ち私の生活の内容が十分に反省されてゐない事を自分で反省する外はない」と答えている。彼の文学は実生活の中に強く抑圧を感じることから生まれ、その改造を志向する変革の欲求に支えられつつ結実した。つまり彼にとつては、抑圧に対して立ち向うもの、あるいは抑圧するものの姿をリアルにとらえてその根元と対決する主体（自我）を明確にとらえないおすことに創作の意義があつたのである。その視野の中に、自己のおかれた現在の生活を肯定する道はない。有島の文学は、実生活に苦しみ人間の補償作用でもなければ現状に安住しようとする人間の補強策でもなかつた。

むろんこのことは、有島に「抑圧を独り耐へてゐるもの」への同情があり、それを突破しようとして「自身を破るもの」への深い共感があつたとする本多説前半の指摘を妨げるものではない。彼自身が抑圧を強く感じていなければならないだけ抑圧されている人間存在への同情

や共感深められ、それはまた変革を希求する主体への力づけとなるのである。

こうして、仁右衛門は作者の共感のうちに造型された分身であるけれども、作者その人の延長ではない。桑島昌一は、作者は仁右衛門を通して「現実の人間や社会の虚偽と醜悪を、徹底的に暴露し批判した」と書いている。かなり思い切った断言であるが、作品『カインの末裔』が現存する体制とそれを支える人間の側面を「批判」する働きをもっているという指摘そのものについては異存がない。ところが氏はつづけて「だが、しかし、こうしたカインの末裔としての生きかたは近代市民社会には許容されない」と書き進めている⁽⁵⁰⁾。なぜ、「だがしかし」なのだろうか。またそれならば、氏はいったいどのような箇所がどのような意味において「人間や社会の虚偽と醜悪」への批判になりえていると言うのだろうか。仁右衛門を「一の悪人と断定した」諸説が当を得ていないことはすでに述べたが、一方、彼はまた模範になる善人でもない。革命的自覚を持つてこの農場にやってきた人間でなかつたことなどはあらためてことわるまでもあるまい。そして彼はまた、作者が「派遣した代理人」でもないのである。

有島はわが国近代の文学者の中でも、文学と実生活の関係をもっとも緊密に不可分のものとしてとらえたひとりであつたが、それは

自己の実生活と作中人物の言動を同一視することではなかった。『平凡人の手紙』『卑怯者』については特異な試みがなされているが、いまはふれない。とくに虚構の作品においてはそれは明白である。現に桑島が人間や社会の虚偽と醜悪を批判し暴露した作品だと言ふ『カインの末裔』においては、苛酷な自然を舞台に、そこへ妥協や身をかがめてことをしらない大男を自己の分身として投げ込むという操作がおこなわれている。作者の分身であるその大男——仁右衛門は、△何処からともなくK村に現はれ△時からすでにカインの末裔であり、またその一側面としてではなく全人的にカインの末裔だったのである。

実生活において simmer するものにつきあげられ、その改造を志向した作者が描いた主人公はぬきさしならぬ必然性をもって敗北していく。仁右衛門は△またか△とあだ名されるほどの体軀と腕力の持主であつたけれども、そのような素手の強さにおのずから限界のあることは明らかである。しかも彼の生き方自体がそのまま許容される態のものではない。△無解決な、否定的な結末△はつとに作者みずからの予見したところでもあつた。⁽⁵¹⁾ではなぜ作者はこのような滅びにいたる男を描いたのであろうか。そしてそれはほくらに何を語りかけているのだろうか。

仁右衛門は思いのままに働き、また無暴なふるまいもした。そし

てついに身動きのつかない状態に陥って、わずか一年あまりで農場を去らなければならなくなった。彼の敵は農場主や帳場や小作人たちばかりではない。坂本浩は、仁右衛門について△このたくましい野性人はいはは大自然が生んだ者であるにかかはらず、彼の生みの親の自然との激しい戦ひなくしては、一時も生きることのできない、追ひつめられた男です△⁽⁵²⁾と書いている。これは有島の自作解説を忠実に敷衍しているというべきで、作者によってここに作り出された自然はその主人公を△追ひつめ△る役割を分け持っている。(この作品の自然を単なる背景とみなすことはできない。)

欲求の命するままに生き抜こうとした仁右衛門は、△自然△と△人間社会△のはさみ打ちにあつて無残に滅びる。浅見淵はそのさまを、△題材としては暗い題材なものにも拘らず一種の爽快さへ生んでる△⁽⁵³⁾と評した。ところで主人公の周囲の者たちはどうであつたろうか。要領よく立ち廻つてあくせく小金をためようとしている笠井、小作人の素朴さと無為無気力を絵にしたような川森や佐藤、行儀見習と称して函館の場主の家に妾奉公に出されている笠井の娘、佐藤の妻や子供たち、家と呼ぶこともはばかられるような小屋に住み、満足な食事もできないままに身を削るように働いて年貢を納めなければならぬ小作人たち——。彼らの生活は何年たつてもすこしも改善されないのである。彼らは仁右衛門のようにわずか一年で農場から放逐されるといふことはないけれども、そのためには仁右衛門とは別の滅びの淵に身を沈めていなければならぬ。

小作人の住まいは△二年経っても三年経っても、依然として畑立小屋▽のままだと言ひ、苦しい生活の中で悪循環をくりかえしているいまの農村では△農民達は一生浮はれない▽と考えた有島には、このような状況に対するはげしい怒りがあった。彼はまた、△今日農民のおかれてある悲惨な境遇に、どうして文化などを生む余裕があり得▽ようか、とも言っている。『親子』の素材となった父との争ひのときも、『カインの末裔』の筆を執ったときも、またのちに農場解放にふみきったときにも、この状況を看過できぬものとして憤った彼はとっては、その評論・創作・実践のいずれもともに種々な形をかりた自己主張にはかならなかった。

『カインの末裔』に仮託された作者の△我執▽は必然的に体制の欠陥に批判の刃を向けるものになるが、それは作中の主人公の生き方がそのまま変革の道につながるということの意味するものではない。彼はみずからの△不思議な我執▽を仁右衛門という滅びのリアリティを持った形象に典型化した。読者を横なぐりにするような力感をもって描き出される彼の足跡は、あたかも作中の笠井や佐藤のように滅びの淵に身を沈めながらみずからの滅びを感じることができないでいる読者の目にも、奈落に転落してゆく滅びの姿としてうつる。保身に汲々としながら△一生浮はれない▽笠井や佐藤の生き方も、欲求を即座に実行に移していった仁右衛門の生き方も、そのいずれもが人間としての滅びに通じるという松川農場の小作人の△ディレンマ▽は、一時代の局地的状況ではない。『親子』の父

は、△水呑百姓といへば何時の世でも似たり寄つたりの生活をしてるものだ▽と言ひ聞かせたが、その言葉はただ農民だけをさしているのではない。

状況を無視して暴発し、ひとたまりもなくそこから抹殺されていた仁右衛門の姿はたしかに本多秋五も言ったように△一読あはれをむせろ▽存在である。しかし作者は、simmer じつじつけて boil over しようとする自我の訴えを△力感に溢れる筆勢と仁右衛門のガラガラした強烈な印象▽を通して読者の胸中にたたきつけることよって、かえってその対極をなす存在——状況に身を屈し、自我を喪失しながらその危機にさえ気づかぬ習俗の群れを白日のもとに連れ出すことに成功したのである。作品『カインの末裔』の体制批判とは、この点をおいて他にあるのではない。

(46) (37) と同じ。(47) 『武者小路兄へ』(V・三六)

(48) 『農場開放願末』(VII・五九)

(49) (18) と同じ。(50) (15) と同じ。

(51) (18) と同じ。(52) (6) と同じ。

(53) (5) と同じ。

(54) 『私有農場から共産農園へ』(VII・五二)

(55) 右と同じ。(VII・五七)

(56) 談話筆記『農民文化といふ事』(VII・五五)

(57) (18) と同じ。(58) (37) と同じ。